

アートは必要なのか？ この問いに対してどう答えるのか？ —私は、「私というアイデンティティ」を 確認するために必要なものと返答する。

作品を目の前にすると、いつもそこには私がいるような気がする。作品によって、私が触発され、私が表出している瞬間に遭遇することが、アートが存在する必然性ではないだろうか。それは作品を制作するアーティストにも同様のことが言える。私が思い、考え、感じた何かを表出し、かたちになり、作品になる。それはアートだけが持つ特殊なものではなく、どこにでもある。テレビを見る、本を読む、友人と話すことと何ら変わらない。アートが経済活動と無縁で、高尚で純粋なものというのとはや幻想で、資本主義社会である限り、アートもマーケットがなければ、成立しない。だとすれば、アートも社会とともにあるべきだし、そう考えるべきではないだろうか。それを踏まえると、美術大学が果たす役割はアーティストを育てることだけなのか？という疑問が出てくる。アートが社会とのつながりの中でどういう役割を果たすことができるのか。その一端を担う美術大学はアーティストを育てるだけでなく、アートの環境を育てていくという方向に転換すべきであり、積極的な姿勢を示すべきではないのか。それを実現するための第一歩として、今回のイベントを企画した。

本日のイベントは二部構成になっている。一部は図書館ツアーと石川直樹氏と中山英之氏によるトークセッション、二部では大橋可也振付、東野祥子出演「9 (nine)」を上演する。これらは、新しい図書館のこを知ってほしいということと、図書館で何ができるのかという二つの実験的な試みを実現させるための仕掛けとして、同じ日に開催することにした。それはこの図書館が通常の図書館とは異なり、図書館の機能とは相容れない目的のために機能が備わってしまったことに由来する。この刺激的で多奏的な空間をそれぞれアーティストたちがどうとらえるのか、観客の皆さんにはそれを目撃してもらいたい。また、関連イベントについてだが、公演の前後には作品が完成するまでのプロセスと、作品が発表され、作品について語られるまでのプロセスとがある。今回、公演と関連イベントを通して、作品とその周辺の出来事を意図的にドキュメントしていき、それらをすくいあげ、観客に提示していくことを試みている。そのことによって、作品が、あるいは振付家が、ダンサーが、観客がどういう反応を示すのか、そういう場をつくるということを意図としている。(企画・制作/村山季美)

なぜ私が大橋可也と 作品をつくるのか

「あたしって誤解されているのよね。」とヨウコさんはいうのだが、僕も誤解してたかも知れません。なのだが、現代社会における身体の在り方への懐疑、それを活動の出発点としているのは、東野祥子も大橋可也も同じなのだ。正反対な方向に向かおうとしている僕たちが9 (nine)でタグを組むことは、その共通とする出発点を明らかにし、そこから広がっていくダンスの可能性を見極めようという試みのだよ。大橋可也にとっては、最高の身体と精神を持つダンサーを手に入れたわけだから、これで傑作にならないわけはないだろう。と自分自身にプレッシャーを与えておくとする。(大橋可也)

出発点へ

可也さんの世界は私の創る世界とは単純に見ると、ずいぶん違うように感じられる。実際違った形態を用いて創作をしている。しかし、偶然というか必然？私が飛行機に乗り遅れたために、イタリアの僻地ツアーを共にし、ダンスについてじっくり話す機会があったことが発端。なにかしら共通しているところをいくつかも発見した。ダンスとはなんなのか？今の世の中の事情と生き様と感情をリアルなままそこにあげようとする。体の中から叫んでいたいという思いで作品をつくる。感情のあふれでる身体がしびれていくような感覚をいつも持つて踊っている。舞台上でならストロボや大音量といったプロブスだってそう。私の観念の中には刺激中毒みたいなものも存在する。性格や容姿、仕事や生活、ダンスを除くほとんどのものが驚く程真逆な二人です。でも、人は見た目ではないのだから、ダンスをはじめからもう24年。自分でダンスをつくり出して、はじめて人に振りつけられます。新しい感覚で、自分を、ダンスを、在り方を見る。とても強烈なもの。お互いにとって、チャレンジだし、変えたいという思いで向かってる先はここではない。そんな作品が生まれていく。(東野祥子)